



北方民族博物館だより

No.128



HR4.17 ジャコウウシ毛製ヘッドバンド エスキモー アラスカ/ヌニバク島メコリヤック
11.0×20.0×1.1cm 2022年 Viva V. Smith作

19世紀末に絶滅の危機に瀕したジャコウウシは1930年代にヌニバク島に導入され、現在、島内に500頭以上が生息している。ヌニバク島には島外からジャコウウシ猟をするためにライセンスを得たうえで訪れる者も多く、島民の中には猟のガイドを行って収入を得る者もいる。上質な毛からは編み物が作られ、現地を代表する新たな工芸文化となっている。

目次 Contents

- 1 表紙 ジャコウウシ毛製ヘッドバンド
- 2 企画展「川と魚と北方民族」
- 3 企画展関連講座「映画『オピ川の秋』から知るハンティの暮らし」
／調査報告「アラスカ先住民の生業活動と威信に関する予備調査」
- 4 ロビー展「オホーツクシリーズ⑩ 北の状景から」
／講習会「初めての歩くスキーツアー」
- 5 展覧会「北の縄文展 in 釧路・網走」
／新収蔵資料「2022年度新収蔵資料」
- 6 INFORMATION

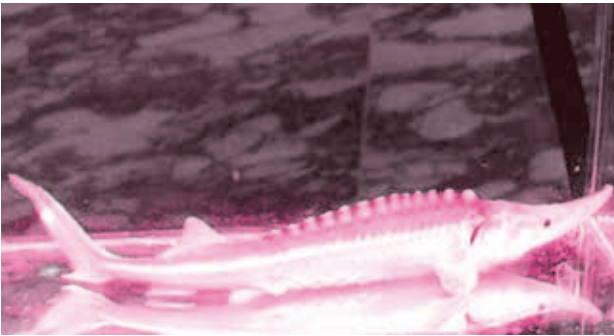
企画展

川と魚と北方民族

協力：標津サーモン科学館

2023.2.4-4.2

北方諸民族にとって、川に生息する魚は重要な資源となってきました。本企画展は「北太平洋沿岸文化圏」、「アムール川流域の漁労文化」、「素材としての魚」の3つのサブテーマで構成し、さらに「ネツリック・イヌイトの石堰漁」、「氷下漁」、「漁労と犬ぞり」の3つの小コーナーを加えて、北方の河川における漁労文化を紹介しました。ここではその概要を報告します。



ダウリアチョウザメ

北太平洋沿岸文化圏

北太平洋にはシロザケ、カラフトマスなど、サケ科サケ属の魚（＝サケ類）が分布しています。サケ類は、川でふ化し、海で成長して産卵のために川に戻るといった生活史を持っています。こうした生活史の特徴から、サケ類は北太平洋沿岸の先住民にとって安定して確保できる重要な資源となってきました。

北太平洋沿岸の先住民文化には、定住生活、漁具や漁法の発達など多くの共通点がみられますが、これはサケ類が豊富な環境に適応した結果と考えられています。こうした文化的共通性を持つ地域は、「北太平洋沿岸文化圏」と呼ばれてきました。北アメリカ側ではエスキモー、北西海岸インディアンなど、ユーラシア側では、イテリメン、ウリチ、ナーナイ、アイヌなどがこの文化圏に含まれます。

このコーナーでは、鉤や鉤鉈、魚止めの柵（模型）など、サケ類を捕るための漁具を中心に展示しました。

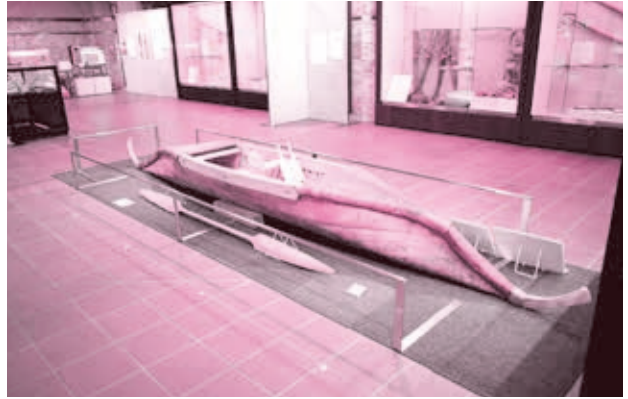
アムール川流域の漁労文化

アムール川（中国名：黒竜江）は、ロシア・中国の国境を流れてオホーツク海にそそぐ大河で、流域にはチョウザメ類を始め、亜種を含めて130種類以上の魚が生息しています。アムール川の流域には、ナーナイ、ウデハ、オロチ、ウリチ、ネギダール、ニブフなどの先住民が暮らし、漁労に依存した生活を送ってきました。

この地域の基本的な漁具は網類で、他にはヤス、鉤、鉈、釣竿などが、魚種や時期、天候などによって使い分けられ

ていました。アムール川流域の先住民は、コイ、ナマズ類などを日常的な食料として利用し、チョウザメ類やシロザケは交易品としても重要な存在でした。

このコーナーでは、漁網や網針、ヤス、鉤などの漁具のほか、ナーナイの白樺樹皮製船を展示しました。



ナーナイの白樺樹皮製船

素材としての魚

川の近くに暮らす先住民は、食料としてだけでなく、さまざまな形で魚を利用してきました。魚皮は、特にアムール川中・下流域からサハリンにかけての地域で活用されてきました。サケ類やイトウ、コイ、ナマズ類、チョウザメ類など、おもに大型の魚皮を素材に、衣類や靴などが作られました。また、魚骨は衣類などの飾りやネックレスに加工され、魚皮や魚の頭などを煮出して作られた膠は接着剤として利用されました。

このコーナーでは、魚皮のなめし具やなめした魚皮、そして魚皮製の衣服、靴、バッグ、魚骨製ネックレスなどを展示しました。

ネツリック・イヌイトの石堰漁

カナダのネツリック・イヌイトは、川に石堰を作り、ホッキョクイワナ漁をおこなってきました。「ネツリック・エスキモー 石堰による漁労」(制作:カナダ国立映画制作庁・アメリカ教育開発センター(1967年))の短縮版(上映時間:12分52秒)を作成し、この漁について紹介しました。

氷下漁

氷下漁とは、冬に川や湖などに張った氷に穴を開けておこなう漁です。この氷下漁について、氷の欠片を除去するための網、釣竿などによって紹介しました。

漁労と犬ぞり

漁労と犬ぞりは無関係にも思えますが、実は大いに関係しています。犬ぞりを引かせるイヌの飼育には、十分な餌を安定的に確保する必要がありましたが、この条件を満たすことができたのは、サケ類の漁労や海獣狩猟をおこなっていた地域でした。このコーナーでは、犬ぞり（模型）と写真で漁撈との関係を紹介しました。

本企画展では、当館初の試みとして、標津サーモン科学館から提供いただいたダウリアチョウザメ、シロザケの生体を展示しました。博物館では珍しい生きた魚の展示に、来館者も関心を示していました。(学芸グループ 中田篤)

企画展関連講座

映画『オビ川の秋』から知る
ハンティの暮らし

2023.2.4 (土) 10:00-11:30

講師 大石侑香氏(神戸大学大学院国際文化学研究所・講師)

企画展の関連事業として、映画「オビ川の秋」を題材に、西シベリアを流れるオビ川流域における先住民ハンティの漁労文化を紹介する講座を開催しました。講師の大石さんは、西シベリアを主なフィールドとしてきた文化人類学研究者です。

最初に、ドキュメンタリー映画「オビ川の秋」(2004年制作、上映時間47分)を上映しました。この映画は、オビ川河口部のツンドラ地域で、トナカイ飼育と漁労を生業とするハンティの家族の秋の様子を紹介した作品です。作品には日本語の吹き替えや字幕はないため、ところどころで講師が内容を説明してくださいました。

次に映画の舞台となった地域の自然、映画に登場する家族の生業活動について、講師自身の研究成果を用いて詳しく解説いただきました。

映画ではハンティの秋の生活が紹介されますが、講師は登場する人びとの語りなどから、家族の一年の生活をまとめ、わかりやすく解説してくださいました。この家族は、漁業会社の従業員としておこなう漁業、自分たちの生業活動としておこなう漁労や狩猟、トナカイ飼育を季節的に組み合わせて生活しています。講師は、それらのなかでも漁労活動の重要性を特に強調していました。

また、博物館の催しだったためか、講師は映画に登場する道具にも注目しました。そして、ハンティの生業に関わる道具として、船外機付きボート、刺し網、狩猟用罟、トナカイ橇、毛皮の衣服や天幕などを紹介しました。

本講座は、映画上映と解説を組み合わせた、これまでにない形での開催となりました。映画だけでなく、それに関連するさまざまな情報に触れることにより、オビ川周辺でのハンティの漁労活動について、受講者の理解が深まったと思います。(学芸グループ 中田篤)



講座の様子

調査報告

アラスカ先住民の生業活動と威信に関する予備調査

2022.9.7-9.24

調査者：野口泰弥(当館学芸員)

文部科学省の補助事業として実施されている北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)の社会文化課題の一環として、アメリカ・アラスカ州とワシントン州シアトルで現地調査を実施しました。

調査の目的はアラスカ先住民の生業である狩猟と、それを成功させることで生じうると考えられる猟師としての威信や権威の関係を、特に物質文化に力点を置きつつ明らかにすることです。今回は予備調査としてアンカレッジ、ウトキアグヴィク(旧称バロー)、ヌニバク島メコリャックを訪問しました。アンカレッジ、ウトキアグヴィク、シアトルでは現地の博物館で捕鯨やアザラシ猟に用いられる物質文化を調査しました。その結果、捕鯨を行ってきたアリュート社会とイヌピアック社会では、捕鯨の成功が共に社会的威信と結びついている一方で、その威信の物質文化への反映は、イヌピアック社会ではほとんど見られないという見込みを得ました。このことは今後、より広範な資料を用いて検討していきたいと思えます。

ヌニバク島では村役場に滞在しながら予備的な聞き取り調査を行いました。ヌニバク島は20世紀前半に複数の文化人類学者によって調査され、伝統文化に関する詳細な民族誌が残されています。それによると、1930年代のヌニバク島では、猟師はアゴヒゲアザラシ猟の能力によって評価され、その猟の成功により威信を得ることが出来たとされています。しかし今回の調査ではアゴヒゲアザラシを特別視するような語りは聞かれませんでした。今後、アザラシ猟のシーズンなどに再訪し、アゴヒゲアザラシに関わる価値



メコリャックの様子

観の変化などを研究したいと思えます。

またヌニバク島には、かつては生息していなかったジャコウウシが1930年代に導入され、現在では現地の経済に重要な役割を果たしていることが分かりました。

本号の表紙で紹介している毛編物もその一つです。今後、新たに導入されたジャコウウシが現地の経済や文化に与えた影響、そしてこのような新来の動物を狩猟することと威信の関係をより詳細に解明したいと思います。

(学芸グループ 野口泰弥)

ロビー展

オホーツクシリーズ⑩
北の状景から

2023.1.4-1.22

会場：当館特別展示室

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の16回目として、この時期恒例となった写真展「北の状景から」を開催しました。この写真展では、オホーツク地域の自然や街、牧草地や畑の風景、動植物などを撮影したアマチュア・カメラマンの作品を展示してきました。今回は、昨年度も出展いただいた橋本敏一さん、伊藤博己さんに加え、関根健太郎さん、門間あゆみさん、山崎七重さん、小鳥遊シオンさんにそれぞれ8～10点、計57点の作品を出展していただきました。

橋本さんは、今回はエゾモモンガを被写体とし、木の洞から顔を出した様子や夜空を滑空する姿など、様々な表情を捉えた作品を出展してくださいました。伊藤さんは動物写真を得意としておられますが、今回は厚い雲間から光が差し風景など、鮮烈な空模様を捉えた作品が印象的でした。登山が趣味の関根さんの作品は、山で撮影された風景や動物写真で、オホーツク地域の「北の状景」に新たな視点を加えていただきました。

その他の出展者の作品は、地域ではよく知られた場所でありながら、それぞれ独創的な視点が活かされていました。小鳥遊さんの作品では、低い位置から見上げるように捉えられたクリンソウと森の風景、山崎さんの作品では、青空の下、青い麦が力強く茂る様子が心に残りました。また、門間さんの作品「今日こそは…」は、朝焼けのなか、サケ釣りの竿を前にした人物の写真で、タイトルとの組み合わせにも表現の巧みさを感じました。

ロビー展には、出展者ご本人や近隣の方々、最近少しずつ戻りつつある観光客も訪れ、多彩なオホーツクの状景を楽しんでいました。(学芸グループ 中田篤)



会場の様子

講習会

初めての歩くスキーツアー

2023.1.14 10:00-12:00

会場：道立オホーツク公園研修室、公園内 歩くスキーコース

講師：中田篤（当館主任学芸員）、藤本幹人氏、
中川一弘氏、藤本珠里氏（網走スキー協会）

道立オホーツク公園との共催により、例年この時期に行っている歩くスキーの講習会をおこないました。

最初に道立オホーツク公園センターハウスの研修室に集合し、北方諸民族のスキーやかんじきについて、学芸員が写真や実物の民族資料を使って説明しました。スキーやかんじき、スノーシューが雪上の移動手段として北方地域で広く使われてきたこと、また、現在でも狩猟などの際に使われることなどを紹介しました。

次にスキー協会の皆さんの指導により、オホーツク公園内に設置された歩くスキーコースで体験をおこないました。まず、センターハウス内でスキー靴を履き、スキーへの取り付け方や進み方に関する説明を受けました。歩くスキーは一見するとグレンデのスキーに似ていますが、細かい部分には違いもあります。例えば歩くスキーでは、靴のつま先部分がスキーに固定され、かかとはスキーから浮かせることができます。また、スキー板の裏側にはウロコ状の刻みが付けられていて、前進しやすく、後退しにくい構造になっています。

そして、いよいよ歩くスキーの体験です。実際にコースに出てみると、最初は皆、ぎこちない動きをしていましたが、苦勞して歩いているうちに、だんだんとコツをつかんで早く進めるようになっていきました。途中、ちょっとした雪のかたまりに引っかかって転んだり、下り坂がこわくて立ち止まったりする人もいて、それぞれのスピードには差が出ましたが、最終的にほとんどの参加者が1周約2.2kmのコースを歩ききり、なかには2周した方もいらっしゃいました。(学芸グループ 中田篤)



参加者たち

展覧会

北の縄文展 2022 in 釧路・網走

2022.9.17-10.29(釧路) 10.30-12.1(網走)

主催：北海道・北海道教育委員会

2021年7月27日、「北海道・北東北の縄文遺跡群」のユネスコ世界遺産への登録が決定しました。「北海道・北東北の縄文遺跡群」では、北東アジアにおいて農耕に頼ることなく、1万年以上も定住生活を維持した文化があったことを示すものとして、千歳市キウス周堤墓群、伊達市北黄金貝塚、洞爺湖町入江貝塚・高砂貝塚、函館市垣ノ島遺跡・大船遺跡の道内6遺跡を含む17遺跡が構成資産となっています。

北海道では、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の登録による縄文時代への興味関心の高まりを、構成資産が集中する道南地域にとどまらず、全道に波及させるために、全道各地で展示や講演会などを行っています。2022年度は、余市水産博物館、釧路市立博物館、北海道立北方民族博物館、浦幌町立博物館で展示や展示解説、講演会を行っています。

釧路市立博物館と北海道立北方民族博物館で開催した「北の縄文展 2022 in 釧路・網走」は、ふたつのテーマで構成しました。ひとつは道内各地に縄文時代の遺跡があり、身近なものであること、もうひとつは縄文時代における本州やサハリンとの結びつきです。このふたつのテーマで、道東地域を中心に22機関の協力を得て、300点以上の遺物が集結しました。道東地域の縄文時代についての展示としては、これまで例がない規模のものです。また、展示に協力いただいた10人以上もの学芸員によるフロアトークでは、来館者に実際に展示ケースの中にある遺物に触れていただきましたが、これも道内で初の試みでした。

北海道では今後もこのような催しを道内各地で開催する予定です。是非ご参加いただき、本物の縄文時代に触れていただければと思います。

(北海道環境生活部文化局文化振興課縄文世界遺産推進室 村本周三)



新収蔵資料

2022年度新収蔵資料

北方民族博物館では、毎年北方諸民族に関する資料の収集をおこなっています。収集する資料は、衣類や生活用具、工芸品などの実物資料、伝統的な文化や現在の状況を記録した映像資料の二つに分けられます。また、一般の方からご寄贈いただく資料もあります。2022年度は実物資料26点、映像資料5点を収集し、9件の寄贈を受け入れました。



左) ナプキン止め (エスキモー、グリーンランド)
右) ナイフ (エスキモー、アラスカ)

今年度の実物資料の大半は、グリーンランドとアメリカ・アラスカ州で収集されたエスキモーの工芸品や土産品などです。グリーンランドからはナプキン止めやキーホルダー、アラスカ州からは衣類やイヤリング、そしてジャコウウシ毛製のヘアバンド(表紙参照)などを収集しました。

映像資料は、館内の上映会「北方民族博物館シアター」で上映したり、館外の講演会・研究会などに当館のスタッフが持参して上映するという形で活用しています。今年度収集した作品は、「フィッシャー川」(15分)、「キャンプ・モーニングスター」(15分)、「マシソン島」(13分)、「ポブラ川」(9分)、「ラクウェサ・ワ：川の強さ」(54分)です。最初の4本は、「ウニペグ湖プロジェクト」と名付けられた2021年制作のドキュメンタリー四部作で、ウニペグ湖周辺の4集落に暮らす人びとが、外部からの様々な圧力にいかに対処しているのかに注目した作品です。

5番目の作品は、伝統的な漁法の紹介や将来的に継続可能な漁業を構築するための先住民の努力を、カナダ北西海岸先住民の豊かな漁労の伝統「ラクウェサ・ワ：川の強さ」として報告したもので、1995年の制作です。

寄贈資料は、当館第4代館長・岡田淳子氏より寄贈された北方地域の民族学・考古学に関する学術書、学術雑誌等2340点をはじめ、約50年前に網走で製作されたウイルクの刺繍製品や木偶、アザラシやキツネなどの毛皮製品、ロシア・サハ共和国やモンゴルの土産品などです。

これらの資料は、北方民族博物館の財産として永く保存するとともに、今後の研究活動や展示、講座や講習会、上映会といった普及活動など、さまざまな機会を設けて活用していきたいと考えています。

(学芸グループ 中田篤)

ロビー展

『Extreme.Relay. 伝統を継ぐレース』写真展

会期 令和5年(2023年)4月22日(土)～5月14日(日)

会場 北海道立北方民族博物館ロビー

主催 北海道立北方民族博物館

協力 カナダ大使館

観覧無料

Extreme.Relayはインディアンレースともよばれる、北米でうまれ、数世紀にわたって先住民の間で行われてきた騎馬競争です。激しく、危険でスリルに満ち、騎手たちの素晴らしい技術をみることができます。カナダ人写真家のジュリー・ビンセントとジェイソン・ローレンスにより撮影されたこのレースの写真展を開催します。

北海道立北方民族博物館研究紀要第32号目次

令和5年(2023年)3月刊

<研究ノート>

大島稔、野口泰弥

服部文庫公開シリーズ9 日本人によるアリュート民族の研究(5):服部健「アリュート語資料」(3)

<調査報告>

中田篤

サハ共和国におけるトナカイ牧畜の変遷:ソ連崩壊から現在まで

種石悠

焼尻・天売島のオホーツク文化

<資料紹介>

宮地鼓、吉本忍

北海道立北方民族博物館所蔵—アイヌの刀掛帯の製織技法と素材

<資料>

山田祥子

池上文庫公開シリーズ2 北海道立北方民族博物館が所蔵する池上二良氏の音声資料(引照付きリスト)

笹倉いる美

のりりすと2022 北方研究データベース

INFORMATION

行事報告

◆12月17日(土)はくぶつかんクラブ「皮とフェルトでつくるカレンダー」(講師:菅原章子解説員)を開催しました。



上手につくれるかな?

◆1月21日(土)はくぶつかんクラブ「ブーツ型ヨーヨー」(講師:石原生久代解説員)を開催しました。



目指せヨーヨーマスター!

◆2月11日(土・祝)第33回北方民族博物館開館記念感謝DAYイベントとしてトナカイそり体験、かんじき体験などを開催しました。



トナカイそりを楽しむ来館者

◆2月18日(土)はくぶつかんクラブ「かんじき体験」(講師:野口泰弥学芸員)を開催しました。



森の中でエゾリスを見つけたよ

◆3月4日(土)はくぶつかんクラブ「まが玉づくり」(講師:塩谷舞解説員)を開催しました。



まが玉づくりは大変だ!

学芸員実務実習

1月31日(火)～2月5日(日)、2022年度の北海道立北方民族博物館学芸員実務実習として2名の実習生を受け入れました。

北方民族博物館だより

No.128

令和5年(2023年)3月17日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会